

日本人にとっての「元社」とは何か — 諏訪本宮・多祁御奈刀弥神社

日本全国に分布する神社の多くは、おおもととなる神社から分祀されたものであり、その発端である「元社」が存在します。果たしてどこが「元社」にあたる神社なのか……そのルーツを探ることとはつまり、隠された太古のミステリーを読み解くことであり、人跡未踏の地に現代人が足を踏み入れることでもあります。今回は、諏訪社の「元社」と噂される、諏訪本宮・多祁御奈刀弥神社（徳島県）の事例をもとに、神社におけるルーツの意味を探ります。

●神社という「場所」の重要性

— 神社は日本人のルーツであり、それを自覚することこそ、私たちがバワフルに生きることにつながる。加えて、それは私たちの固有の物語であり、喪失してはならないという内容が前回のお話でした。では、神社が失われてしまった場合、日本はどのような状況になってしまうのでしょうか。

オキタ／まずは下の写真を見てください。この瓦礫の山はいったい何だと思えますか？ おぞましいことに、これは神社の社殿なのです。信じられませんか？

この古社はもともと格式の高い神社でしたが、人知れず風化していき、あげくの果てに瓦礫の山となってしまうようになりました。当然ながら、こんな状態では社殿のたて直しが出来ず、荒廃したまま放置され、現在は近隣の小祠に統合されています。

このような事實は、人々に愛されてきた掛けがえのない唯一の場所が失われたという意味において悲劇で

すが、これがもし延喜式内社であったならば、私たち日本人にとって、より深刻な損失といえます。考えただけでゾッとします。神社はすなわち、民族の記憶が保存された「場所」でもあります。現在、全国的に行っている神社の放置による廃墟化、あるいは廃止や統廃合は、いずれもこの「場所」を確認するための手がかりを喪失させる愚行なのです。

場所が分からなくなること、本来の物語を呼び戻すための手がかりは、永久に喪失してしまいます。職人技術の粋を集めて建造された神社建築の造形は、その土地に本来ある神話や伝承と結びついていますし、祭祀の方法もまた場所性と不可分なのです。場所の喪失はすなわち、有形・無形の記憶のすべてが歴史から消滅することと同義です。

文化のデータベースであった神社が無くなれば、ルーツを探るための様々な手がかりも失われてしまいます。日本という国の輪郭が、刻一刻と失われているのです。

— 場所と結びついた記憶が失われてしまうと何が問

題なのでしょうが。

オキタ／ひとことで分かりやすく言うならば、民族固有の記憶が失われると、すべての日本人の生き甲斐が失われます。核となるプライドがなくなり、目の輝きを失った曇った人々ばかりになる。抜け殻のような人間が量産されることになるでしょう。日本人らしい品格がなくなれば、それはもう日本人ではありません。

民族としての記憶（ミーム）の喪失は、日本人が日本人としてのリアリティを感じられなくなることであり、日本人としての主張を失うことでもあります。多くの日本人が常に謝罪して歩き回るような、自虐的な世界が現出し、世界からも軽視される民族になってしまうことでしょうか。

加えて引き起こされることとして、外部からの侵略を受け、支配されてしまうという大きな問題があります。文化的魅力（異質性）がすなわち民族性の違いを示すものであり、同化の防壁になっているという事実があるのです。

たとえば中華帝国とチベットは、もともと文化がまったく異質であり、隣国として交流は合っていました。近代になり政治的支配とともに文化的同化が起こり、ふたたびもとの関係に戻らなくなってしまう。昭和天皇と謁見したマッカーサー元帥もまた、そこに日本の威厳のようなものを感じ、考えを改めたのかもしれない。相互の文化的尊敬が、民族と民族を隔てる要であり、そのおおもとが失われてはならないのです。

政治的な意味での民族同化は大きな問題ですが、神社本来の信仰系統が失われ、文脈が断絶してしまう問題も深刻です。私の故郷である徳島に八幡社が多いのは、長宗我部氏による侵略のためであり、もともとの土地柄とは関係ありません。紋や瓦を見れば、現在祀られてい

る神がその土地由来でないことはすぐに分かります。

●まずは「元社」に着目する

— 日本人の民族性を示す象徴としての神社を保全するためには有効な手段としては、どのような方法が考えられますか？

オキタ／神社本庁が包括している神社は、日本に八万社ほどあるそうですが、当然ながら、そのすべてを一度に復興することはまず不可能でしょう。そこで、復興のためのロードマップが必要になるわけですが、私手がかりにしているのが、『延喜式神名帳』に記載された神社（式内社）であり、そのなかでも特に重要視しているのが、主要な信仰系統の「元社」にあたる神社です。

『延喜式神名帳』は、朝廷と強い結びつきをもった神社をリスト化したものであり、そこに列挙された式内社はいずれも朝廷が定めた重要な神社であると考えられます。『延喜式神名帳』は平安時代に編纂されたから、いずれも千年以上続いている古社であり、その



建御名方神と建御雷神が力比べをしたという「ちから石」。社殿の地下にはより巨大な、本当の「ちから石」が埋まっているという言い伝えも。



入り口には阿吽の狛犬に加え、二体の随神像が配されている。独特な雰囲気だ。

諏訪本宮・多祁御奈刀弥神社の外観。周辺には、建御名方神の母である、沼河比売、兄弟である事代主を祀る神社などがある。(いずれも延喜式内社としては阿波にしか存在しない)



管理人不在のまま極限まで荒廃し、ついには木屑となってしまった神社(徳島県某所)。もとは格式の高い神社であったが、見る影もない。このような状態の神社が、全国レベルで見れば数え切れないほど存在する。

オキタリュウイチ クリエイティブディレクター
株式会社 okita-museum 代表取締役・村式株式会社取締役

昭和51(1976)年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の老舗企業再生等に従事。京都の老舗米屋をネットで17億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や日本財団と共催し障害者の起業支援を行うなど、社会的課題の解決に取り組む。

【式内社とは何か？】

式内社(延喜式内社)とは、延長5年(927年)にまとめられた『延喜式』の巻九・十に収められた『延喜式神名帳』に記載されている神社のことを指します。これらは、律令制のもと祭祀を司る神祇官から幣帛(神前への捧げ物)を受けとっていた神社であり、それゆえに非常に格式の高い神社であったと考えられます。また、社格によって官幣大社、官幣小社、国幣大社、国幣小社に分けられ、全国で2,861社3,132座あったと記録されます。古社の格式を知る上で、この『延喜式神名帳』の記述はとて重要な手掛かりになります。

土地の風土や物語と結びついた意味を有しています。ただ、全国の式内社の総数をカウントすると、実に三千百三十二座におよぶため、そのなかでも優先的に守る神社の目処をつける必要があります。そこで、数ある式内社のなかでも特にルーツにあたると思われる「元社」を数社ほど選定し、まずはその神社から保全することが重要であることを訴えているのです。

神社の主な信仰系統としては、八幡・天神・稲荷・伊勢・出雲・春日・熊野・祇園・諏訪・白山・住吉の十一社がありますね。この十一社のなかで、近年「元社」ブームが巻き起こった代表的な例が「伊勢」でした。伊勢神宮は世界的にも認知度が高い神社であり、年間の参拝者数がときに一千万人を超えるほどの人気があります。その伊勢ブームの裏側で起っていた「元伊勢」ブームによって、丹波の籠神社をはじめ、伊勢神宮の「元社」にあたると思われる神社もまた参拝者で賑わった現象は記憶に新しいですね。

果たして、どの神社が正しい「元社」なのかという議論は他方ですが、私はこのような流行、つまり「元社」ブームが起こることは良い気運ではないかと捉えています。というのも、人間の営みと同様、神社にもまた神々が現在まさに住んでいる「自宅」今宮と出身地としての「実家」元社があり、その両方を拠点とするのが健全なあり方ではないかと思うからです。

平日に仕事が終わったら、普段は「自宅」に帰るのが日常ですが、年に数回ぐらいは「実家」に帰って親族との絆を確かめたい。そのような思いで、神社の「実家」である「元社」を訪れる人が増えれば、日本はもつと元気になるはず。毎年、年末年始に「実家」に帰省するからこそ、新たな気持ちで仕事に打ち込めるのですから。

述どおり諏訪社の「元社」であったとして、諏訪大社との関係はどうなるのでしょうか。私は史実がどうであれ、信州長野の諏訪大社は諏訪信仰の本拠地であり、最も重要な神社であろうと考えています。加えて、この多祁御奈刀弥神社もまた、同様に重要な神社であることを強調したいのです。もし、建御名方神に詣でたいのであれば、ふだんは諏訪大社に、たまには多祁御奈刀弥神社に参拝するのが最も望ましいあり方ではないでしょうか。日常的には「自宅」が心地よいが、ときには「実家」に帰ることで、より神との絆が深まるのではないかと思うのです。

——籠神社はじめ、元伊勢にあたる神社は話題を呼びましたが、こちらの多祁御奈刀弥神社は注目されているのでしょうか。

オキタ いや、残念ながらもまったく認知されていません。阿波の郷土史を研究されている方々が重視しているだけで、まだ一般的にはこの神社の重要性が知られていないのです。

その事実は、実際にこの神社に行ってみればよく分かります。多祁御奈刀弥神社は式内社ですが、現在では社領も狭く、拝殿と御本殿が一体化した質素な建物が一つあるだけの状態です。祭事の際には近隣の崇敬者の方々が集まりますが、若者が不足しており、神輿の担ぎ手がいません。台車に乗せたタイヤ付きの神輿で移動するしかないのです。

そのような苦しい状況ですが、宮司さんや氏子総代さんからよく話を聞いてみると、この神社にまつわる興味深い噂がいろいろと浮かび上がってきました。拝殿とつながった御本殿の奥にある御扉はもう長いあいだずっと開かれていないらしく、奥に何が隠されているのか宮司さんにも知らないという事実。境内の隅に



●「元諏訪」という新たな聖地

——「元社」をめぐる活動として、このごろ本格的に取り組んでいる事例についてお話しください。

オキタ 元伊勢ブームを礼賛していることについては先ほど述べましたが、特に重要な「元社」として私がこのごろ注目している神社がもう一社あります。それが、徳島県の石井町にある諏訪本宮・多祁御奈刀弥神社です。この神社は、信州の諏訪大社はじめ、全国で二万社あるとも言われる諏訪社の「元社」にあたると思われる神社であり、その規模から見ても、日本でとりわけ重要な「元社」の一つであろうと確信しています。

この神社が本宮に諏訪社の「元社」にあたるのか否か、諸説ありますが、祭神である建御名方神と親縁関係にある神々を祀る式内社がこの近隣にしか存在しないことや、この神社が置かれていた場所の旧地名が「名方郡」という名称であること、宝亀十年に阿波から諏訪に移されたという史料などから類推して、おそらくは諏訪社の「元社」に相違ないと私は考えています。それでは、仮にこの多祁御奈刀弥神社が古文書の記



現場視察中のオキタリュウイチ。宮司の工藤雅博氏、氏子代表の方々など、神社関係者と情報を交わし合う。



置かれた「ちから石」が実はレプリカであり、本物の巨大な石が地下に埋まっているという言い伝え。洪水の際に、建御名方命のライバルである武甕槌命を祀る神社から、この付近まで木造の御神体が流れてきた（宿命のライバルを求めてわざわざ移動してきた？）というエピソードなど、いずれも興味深いです。かつての景観は失われていても、歴史ある式内社には、それぞれ魅力的なエピソードが隠されており、その奥にある秘められたる意味を探りたい気持ちにさせられます。古社それぞれの物語は小説よりも優れたミステリーであり、それを読み解いていくことが醍醐味なのです。

●神社復興のための実践プラン

——まずはこの阿波の多祁御奈刀弥神社をテストモデルとして、古社復興のための計画を実行しているとのことですが、その詳細についてお聞かせください。

オキタ 多祁御奈刀弥神社はその歴史的重要性の割には、本宮に氏子数の少ない質素な神社なのですが、だからこそ復興が実現したならば、有力な前例モデルとなるはずです。

私は定期的にこちらの神社にお伺いしており、宮司さんや氏子さんたちとともに、復興につながるような、さまざまな企画を進めています。例えば、インターネットを使用した新たな崇敬者獲得（ネット氏子）の試み、ネットを介した資金調達の仕組みであるクラウドファンディングの活用、YouTubeなど動画サイトでのPRムービーの公開、Facebookなど各ソーシャルメディアを有効活用したユニークな話題づくりなど、デジタルを駆使した施策は神社と相性が良いと考え、実現性の高いところから徐々に形にしているところです。



御旅所での御神事の風景。



本殿の扉を開けたところ。この奥にはもうひとつの扉があるが、宮司もふくめ誰も開いたことはない。先代、先々代の宮司もこの扉を開けなかったという。



若手の氏子が不足しているため、祭事の際にはタイヤ付きの神輿を使用している。

インターネットを用いた手法自体には新鮮味はありませんが、やはり無限の拡散性をもっている点からも、神社復興プログラムを飛躍的に前進させる可能性があるのではないかと考えています。

元来、神社は近隣に居住する崇敬者によって保全維持されてきましたが、現在ではその崇敬者（氏子）の数は減少する一方です。地方の過疎化の問題が大きいのですが、現代では地方自治体の方針で自動的に各神社の氏子が割り振られてしまうというのも主因です。神社の信仰はもともと自発的なものであり、何社を掛け持ちしても問題なかったのですが、現代ではそうなっていない。インターネットの仕組みを用いることで、遠隔にいる人も自由意志で好きな神社を応援することが可能になり、自由に複数の神社の崇敬者になることも出来るので、本来の信仰のかたちに立ち戻るのではないかと期待されます。

一方、インターネット上の表現を用いて、各神社の危機的状況が可視化されるような仕組みも実現できないか検討しています。この神社は戸が外れていて大工さん二人分の仕事が必要とか、この神社は明日例祭だが神輿の担ぎ手が十人足りない……というように、各地域の地図とともに必要な情報が表示される「古社デジタルマップ」を作成できれば非常に有用なはず。現代はメディアの手段が多様であり、危機を呼びかける手立てはさまざまあると考えられます。あらゆる手法を駆使して、認知と興味を促し、この危機的状況を打開しなくてはなりません。

——デジタル以外の手法を用いたアプローチはどうでしょう。

オキタ／アナログで人為的な手法も、多祁御奈刀弥神社の宮司さんや氏子の方々と進めています。神社境内



境内の随所で見かける「違い釜」の紋。とくに藁で造られた紋は珍しい。



【神社の基本情報】

式内社 諏訪本宮・多祁御奈刀弥神社（たけみなとみじんじゃ）
所在地：徳島県名西郡石井町浦字諏訪 213 - 1
御祭神：建御名方命・八坂刀貴命
※現在の社殿は享保五年（1720）に建造



式内社らしい格式を感じさせる扁額。だが、かつて広大であったろう社額は失われてしまった。

の石を用いて制作している「ちから石」という御守りをオリジナルグッズとして販売することは出来ないかと考えているのですが、このような手作業はとても楽しいし、一緒に活動している実感を共有できる利点があります。

失われた「元社」としての景観を取り戻すための活動として、それらしい威厳のある佇まいを復活させることも目標です。鳥居を立て直したり、「元諏訪」であることを示す石碑なども将来的には建立する必要があると考えています。「元社」であることを数百年、数千年にわたって示すには、未来の人々が直感的に理解できる分かりやすいシンボルが必要なのです。

インターネットを用いた施策は先進的だし飛躍的な可能性を秘めています。やはり人と人との関係を構築するためには、昔ながらの地道な共同作業が必要でしょう。神社のオリジナルグッズを作ったり、景観の建て直しを行うプロジェクトによって、かけがえのない共有体験が育まれます。それがやがて、地域の大きな記憶として人々の心に刻まれるはず。いくら時代が進んだとしても、最も大切な本質が変わることはないのです。

インタビューより編集構成／聞き手・石黒壮明